

◆ 今週のコメント

腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あります。本年の累積報告数は82例で、この時期までの年当たり累積報告数としては、感染症法に基づく届出の対象となった平成11年(4月)以降、最も多くなっています。

◆ 今週のトピックス:<インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は31.26(2126例)で、警報の基準値(30)を超えています。なお、5月21日の新型インフルエンザ市内第1例目の発生以降の入院患者数は81人(約9割(70人)は14歳以下)で、11月4日現在入院中の方は15人です。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例(第43週)[1月以降の累積報告数 82例]

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	31.26	2126
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	1.37	56
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.46	19
	③ 突発性発しん	0.39	16
	④ 流行性耳下腺炎	0.27	11
	⑤ 水痘	0.20	8
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

病原体情報

(検体名は、紙面の都合上、鼻咽喉ぬぐい液をNP、糞便をFC、髄液をSF、尿をURと略す。)

検出病原体 (報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名	検出病原体 (報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名
インフルエンザ菌 b型以外(2)	かぜ症候群(第34週, 第35週)	NP×2	黄色ブドウ球菌(2)	かぜ症候群(第34週, 第35週)	NP×2

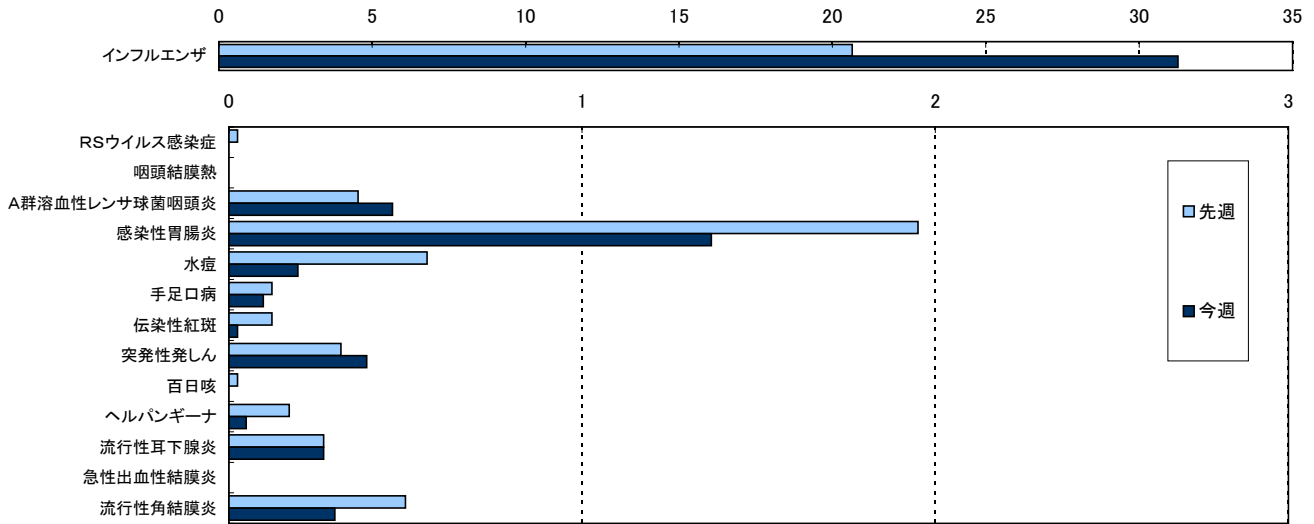
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<インフルエンザ>

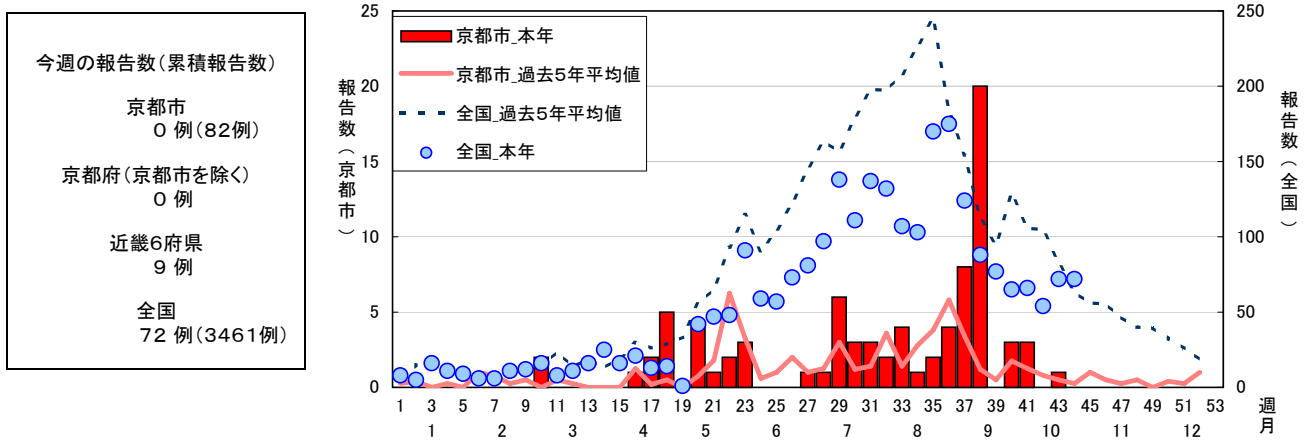
(注)京都市のデータは、平成21年11月5日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第44週)と先週(第43週)の定点当たり報告数の比較



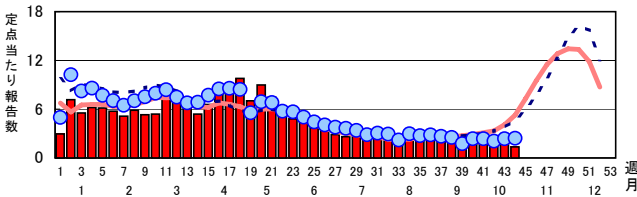
2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移



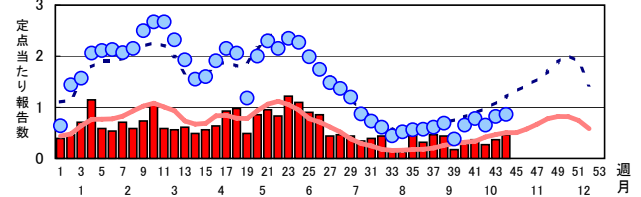
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

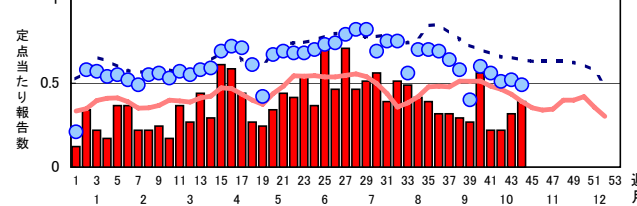
1 感染性胃腸炎



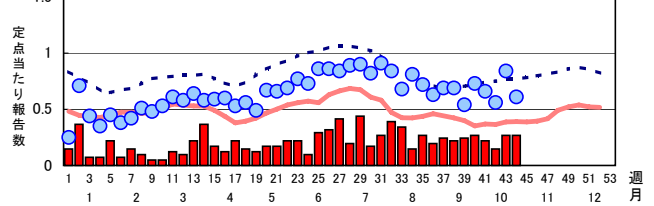
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



3 突発性発しん

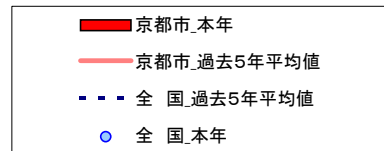
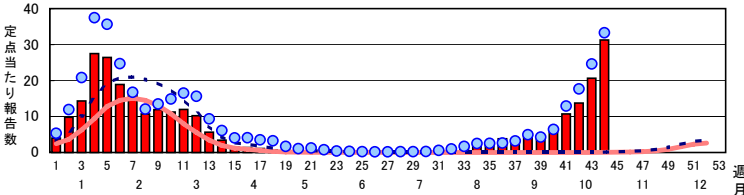


4 流行性耳下腺炎



<インフルエンザ定点>

インフルエンザ



第44週(10月26日～11月1日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は31.26(2126例)で、警報の基準値(30)を超えています。全国でも33.28で警報の基準値を超えており、近畿では6府県のうち京都府を含む4府県で警報の基準値(30)を超えています。

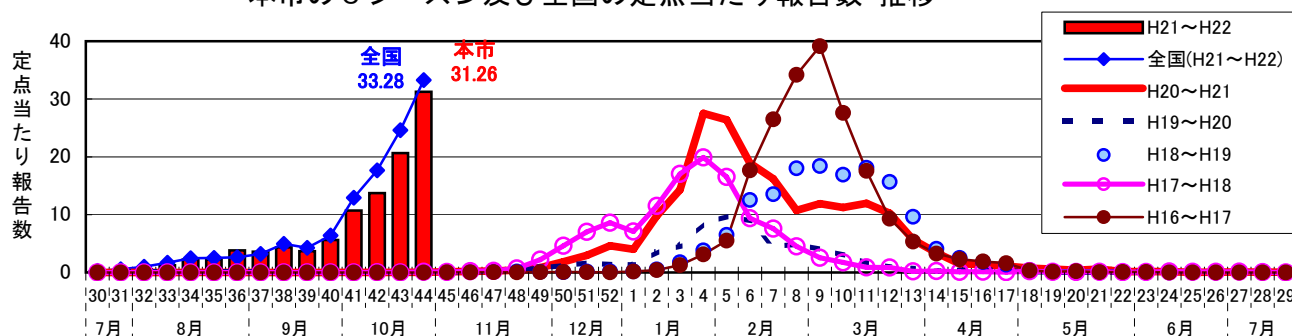
行政区別定点当たり報告数をみると、11行政区中5行政区(東山区、山科区、南区、伏見区、西京区)で警報の基準値(30)を超える値となっています。

年齢群別構成割合では、「5～9歳」、「10～14歳」の順に割合が高くなっており、14歳以下が76.3%を占めています。

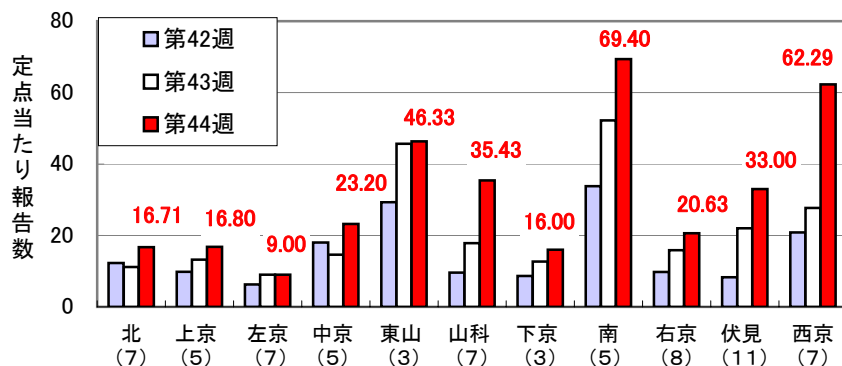
5月21日の新型インフルエンザ市内第1例目の発生以降の入院患者数は81人(約9割(70人)は14歳以下)で、11月4日現在入院中の方は15人です。

なお、第44週に京都市衛生公害研究所でPCR検査を実施した46例のうち、40例からA型インフルエンザウイルスが検出され、そのすべてがAH1pdm(新型)でした(6例は陰性)。

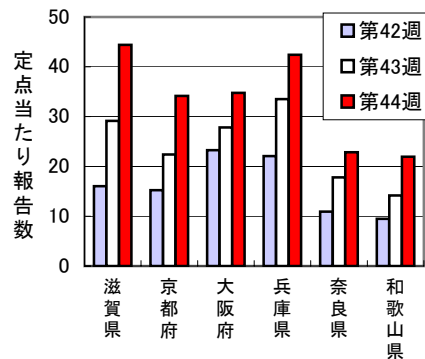
本市の6シーズン及び全国の定点当たり報告数 推移



行政区別定点当たり報告数の推移

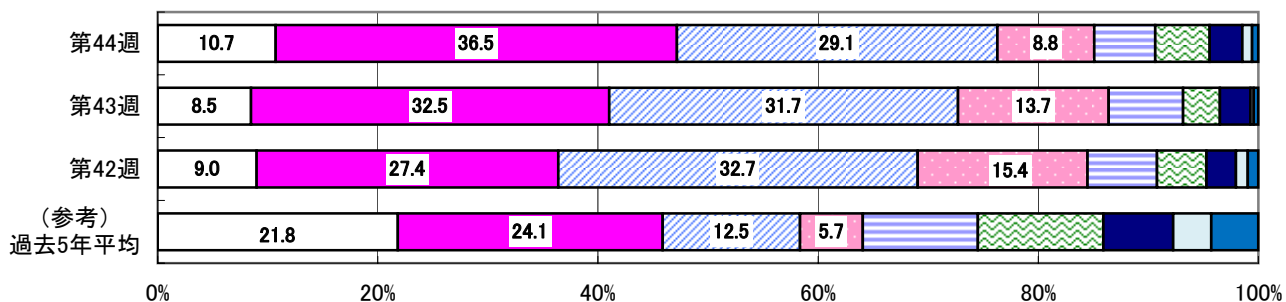


近畿の定点当たり報告数の推移



(注) 定点にどのような医療機関が含まれているかによって、左京、伏見などでは例年、定点当たり報告数が低くなる傾向があります。

年齢群別構成割合の推移



□0～4歳 ■5～9歳 ▨10～14歳 ■15～19歳 ▨20～29歳 ▨30～39歳 ■40～49歳 □50～59歳 ■60歳以上